



自立活動部だより

第2号 平成27年12月25日発行

先月になりますが、秋田県総合教育センターで行われたC講座、『「見る」「聞く」機能の理解と支援』に参加して参りました。講座では、児童生徒の視覚情報や聴覚情報を中心とした情報処理過程における困難さについての理解を深め、授業場面における配慮点や授業づくりの工夫についてヒントを得るために、秋田大学の**大城英名**教授や盲学校、聾学校の先生の講義を拝聴しました。本校の教育活動にも役立つ内容でしたので、ご紹介したいと思います。

大城先生の講話より

- PDD、ADHD、LDなど発達障害といわれる障害は、発達の**偏り**や**ゆがみ**を中心とする。対人関係面、行動面、あるいは学習・認知面に**アンバランス**が見られる。そのことから、近年「**発達アンバランス症候群**」と呼ばれることもある。
- 認知発達のアンバランスは必ずしも解消されるものではない。(図1)
- 認知発達のアンバランスを周囲の人が理解することは難しいということを念頭に置く。(図2)
- 認知発達のアンバランスは入力と出力の間にある頭の中で情報処理が適切に行われないことによって起こる。(図3)
- **学習面の支援においては、認知の偏りに応じた支援が不可欠。**励ましたり、動機付けを高めたりしても有効ではない。
- 認知発達のアンバランスの発見には教育的観点からの実態把握と、WISC-Ⅲ・ⅣやK-ABCなど発達検査などの検査結果から導き出される**心理学的観点からのアセスメント**が有効。
- **子どもの認知特性を読み取るには知識・技能が必要。**

★各学部では小4、中1、高1で発達検査が行われています。また、個人ファイルには現在までの検査の結果が蓄積されています。発達検査の結果を基に、地域支援部の先生方の助けを借りたり、検査についての解釈・事例などが掲載されている本などを読んだりして、認知特性に関する知識を深めましょう。そのことが指導上の悩みを解決する糸口となるかもしれません。



日本版 WISC-Ⅳによる発達障害のアセスメント (日本文化科学社)

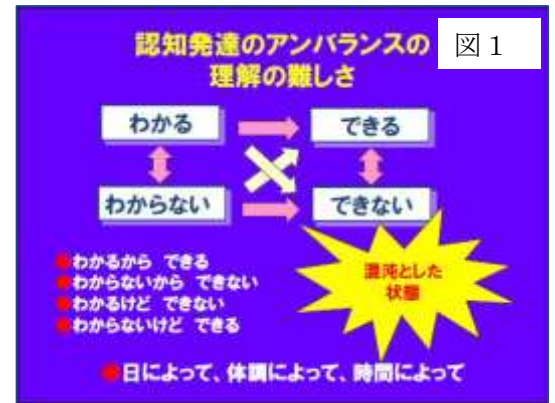


図1

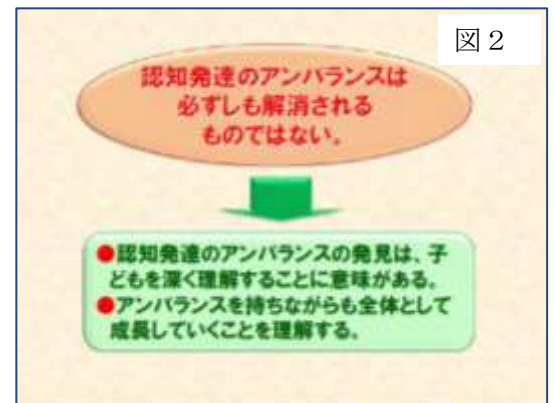


図2

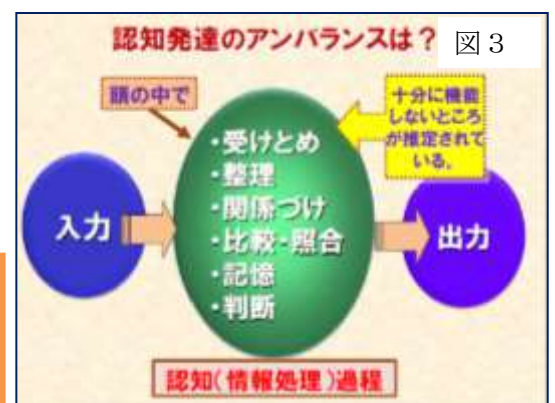


図3